



学校だより No.8 12月発行

埼玉県立所沢特別支援学校

〒359-0003 所沢市中富南 1-1802-7

TEL : 04-2994-8733

FAX : 04-2991-1005

HP : <http://www.tokorozawa-sh.spec.ed.jp>

2学期は宿泊学習や遠足、社会体験学習、そしてトコトコフェスティバルなどたくさん  
の行事がありましたが、平成30年も気が付けばあとわずかとなりました。明日から  
いよいよ冬休みです（平成最後の冬休みになりますね）。来年も皆様にとって良い年であり  
ますことをご祈念申し上げます。また本校の教育活動にご理解とご協力をいただきあり  
がとうございました。3学期もよろしくお願いたします。

さて前号でお知らせしましたとおり、今号はトコトコフェスティバルの様子を中心にお  
伝えします。

# トコトコフェスティバル2018

ステージ発表は大勢の人の前で演技やダンス、合奏などを発表するという大きな不安  
や緊張がありますが、どの子ども日頃の学習の成果を十二分に発揮し、堂々と自分の役割を  
果たすことができました。

しょうがくぶ てい がく ねん

## 小学部低学年 『なろうぜにんじゃ! ~まきものさがしてゴー!~』

小学部低学年は、3年生が演じる忍たま（忍者のたまご）が巻物を見つけて謎を解く修行  
の旅に出て、一人前の忍者に成長するというテーマでステージ発表を行いました。最初に  
訪れた「みなみのしま」では、1年生がかわいらしいハワイアンダンスやギターの演奏を  
発表しました。次に訪れた2年生が演じる「ゆめのくに」では、お姫様を元気づけるた  
め王子様がいろいろなプレゼントを渡す演技と、『USA』の曲に乗って軽快なダンスを  
発表しました。最後は3つの巻物を手に入れた3年生演じる忍たまたちが忍者学校に戻る  
場面。巻物の文字を読んで謎を解き、全員で「ドレミの歌」の合奏を発表しました。



しょうがくぶ こうがくねん

# 小学部高学年 『もりとうみのなかまたち』

しょうがくぶこうがくねん もり うみ く い もの がくねん はっぴょう おこな  
 小学部高学年は森や海で暮らす生き物たちをテーマにそれぞれの学年が発表を行いました。  
 4年生は「きのことむしたちのコンサート」。2部構成の前半は、かわいらしいきのこ  
 たちによるダンスの発表。後半は、虫たちが楽器を演奏し「虫の声」を発表しました。  
 5年生は「かえるちゃんたちのにちじょう」。雨粒を拾ったり、水中をすいすい泳いだり  
 する演技を発表し、歌に合わせて二人一組で布を大きく振り、きれいな虹を表現しまし  
 た。6年生は「アンダー・ザ・シー」。人間に憧れる人魚のために、海の仲間たちが真珠を  
 探してくるというストーリー。熱帯魚やクラゲ、そして執事のカニと、一人一人の個性や  
 特技を発揮した、さすが6年生という素晴らしい発表でした。最後は小高全員での民舞  
 「虎舞」。太鼓の演奏に合わせて、迫力ある踊りを発表しました。



ちゅうがくぶ がくぶきょうつう

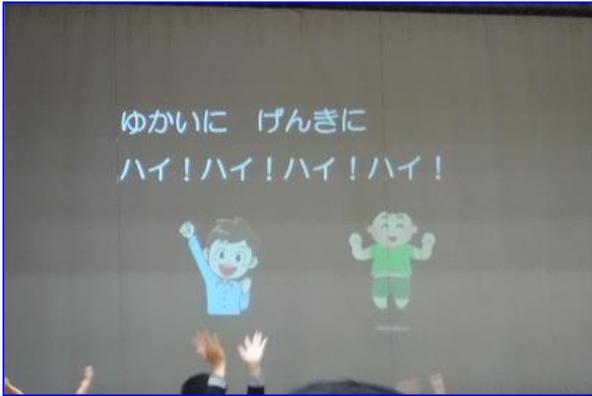
## 中学部 学部共通テーマ <和(わ)>

ちゅうがくぶ がくぶぜんたい がくねん はっぴょう おこな  
 中学部は学部全体のテーマ<和(わ)>に合わせて学年ごとにそれぞれ発表を行いました。  
 1年生は「琉球」をテーマにパーラック、合唱、ダンスを発表し、2年生は「川越  
 まつり」をテーマに鳴子のダンスや和太鼓の演奏を発表しました。そして大トりの3年生  
 は「中3の和」をテーマに修学旅行の思い出を演技で発表し、最後に全員で太鼓の演奏  
 を発表しました。それぞれの学年の発表が見事に調和した中学部らしいステージ発表で  
 した。



ほか こんねんど  
 その他、今年度のはじめのつどい、おわりのつどいでは『トコトコフェスティバルのテ  
 ーマソング』、『世界中の子供たちが…』の歌詞をカラオケのようにスクリーンに映し出す

ようにしました。児童生徒からの反応や評価も非常に良かったです。またPTAのゲームコーナーは、昨年同様午前と午後の2回オープンしていただき、どの子どもも目を輝かせ、会場内は大いに盛り上がりました。また外部団体の方も朝早くから販売のご協力をいただき、買いたいものを選び、おこづかいで買い物ことができました。



## とくべつし えんきょういく み に こうざ 特別支援教育ミニ講座 だい かい 第7回



### <インクルーシブ教育と個別の教育支援計画、個別の指導計画>

最近、インクルーシブ教育とかインクルーシブ社会という言葉がよく聞かれます。インクルーシブ (inclusive) とは「包み込んだ」という意味です。だからインクルーシブ教育は「包み込んだ教育」、インクルーシブ社会とは「包み込んだ社会」ということです。インクルージョン (inclusion) という言い方をするときもありますが、インクルージョンは「包み込む」という意味です。さて、いったい何を「包み込む」のでしょうか？

ユネスコ (UNESCO:国際連合教育科学文化機関) という、世界中の教育についての問題を扱う機関があります。このユネスコが、2005年に「インクルージョンのためのガイドライン」という冊子 (※) を出しています。そこには、こんなことが書かれています。

いろいろな子どもたちがいることを、「よいことだ」と受け止めること。そして子どもたちひとりひとりが「ちがうこと」を「困ったこと」ではなく、「学びを豊かにするチャンス」とすること。こういうことに、力強く近づいていくこと。これがユネスコの考えるインクルージョンです。

「いろいろであること」を多様性といいます。人間の多様性を「包み込む」ことがインクルージョンです。だからインクルーシブ社会とは「多様性を包み込んだ社会」、インクルーシブ教育とは「多様性を包み込んだ教育」です。人間には実に様々なバリエーションがあり、一人ひとりがちがっていて当然

なのであり、そのちがいを包み込み、一人ひとりの独自でかけがえのない色彩を活かせる社会をめざす。これがインクルージョンの底にある考え方です。

ユネスコの「インクルージョンのためのガイドライン」では、世界を見わたした時に、教育に「包み込まれないで、はじき出されている」人たちが、子どもたちだけではなく大人にもたくさんいるとして、次のような例をあげています。

虐待を受けている子どもたち、働いている子どもたち、難民あるいは亡命者の子もたち、移民、宗教的少数者、貧困にあえぐ子どもたち、家事労働をする子どもたち、女の子たち、民族的少数者、言語的少数者、紛争地域の子もたち、ストリートチルドレン、少年兵、先住民族、障害がある子どもたち、女性、農村住民、遊牧民の子もたち、HIV/AIDS孤児。

これらの「はじき出された」人たちが、「その人たちにとって、今、何が必要なのか」にみあった教育を受けられるようにすること。ユネスコは、これが、とても大事ですぐにやらなければならないことだとしています。

現在、日本ではインクルーシブ教育という言葉が、「障害のある子どもと障害のない子どもが同じ学校にいる」という意味でのみでとらえられがちです。しかし、これは人々を障害のある人とない人の2種類に分け、2種類の人間が一緒の場にいることだけを強調する不十分な理解だと思われます。インクルーシブ教育を進めるにあたりまず必要なのは、世の中は「障害者」と「健常者」の2種類の人間でできているのではなく、「多様な人たち」でできているという見方に立つことです。

そして障害がある子どもたちのように、少数派で不便な思いをたくさんしている子どもたちを「包み込む」ためには、「その子どもがどんな子どもで、今、何をめざしていて、そのためにどんなことをしているのか、その結果はどうだったか」を、本人、保護者、学校の先生、福祉や医療の関係者みんなで共有する必要があります。そのためにあるのが、個別の教育支援計画と個別の指導計画です。「どうやって、その子どもを学校さらに社会に包み込むのか」という視点で、個別の教育支援計画と個別の指導計画を作ったり、読んだりしてみてください。

※ UNESCO (2005) Guidelines for Inclusion: Ensuring Access to Education for All.

<http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001402/140224e.pdf>